HOME Bourgogne

# ベルゼ・ラ・ヴィル礼拝堂

文芸評論家
**饗庭　孝男**
あえば・たかお
1930年、滋賀県生まれ。甲南女子大学文学部教授。フランス文学専攻。
著書に「石と光の思想」（勁草書房）、「小林秀雄とその時代」（文芸春秋）、「恩寵の音楽」（音楽之友社）、「西欧と愛」、「ヨーロッパとは何か」（小沢書店）、など多数。先頃、「幻想の都市」（新潮社）、「ヨーロッパの四季」（東京書籍）を上梓。

クリュニー修道院から県道980をとおり、12キロ離れた丘の上にベルゼ・ラ・ヴィルの村がある。街道からのぼってゆくと、何の変哲もない村だが、やや下がったところに倉庫があり、トラックが止まっている。その左を見ると古い建物があり、小さな入口が見える。これがベルゼ・ラ・ヴィル小修道院であり、かつてはクリュニーに属していた。若い修道士の勉強と教育の場所であったが、今は礼拝堂が主たる建物である。

春の淡い光が小径のかたわらにある草むらにおちている。私は入口から中に入って行った。内陣は天気がいいせいか思いの外に明るい。半円のドームの凹んだところの天井にあたる部分から半円アーチの窓の上まで、卵形の枠組の中に「栄光のキリスト」がいる。表現はビザンチン的であるが、その姿態はヴェズレーのサント・マドレーヌ教会の洗礼者志願室（ナルテックス）の半円形壁面にある、「使徒に使命を伝えるキリスト」と似ている。

右手は祝福を、左手は鍵をもった聖パウロに巻物を与えている。この聖人はクリュニー修道院の守護神でもある。またオータンのサン・ラザール教会の正面、半円形壁面にも似て、キリストの左右に使徒と聖人が描かれている。右が6人の使徒、2人の殉教者であるが、それが聖ロレンティウスと聖ヴァンサンであることは言うまでもない。

前者は3世紀、スペインに生まれ、ローマで助祭長に任じられたが、教会財産を守り、ローマの執政官にその引渡しを拒み、拷問の後に殺された聖人である。これはラヴェンナの5世紀のガルラ・プラチディア廟のなかにもあるテーマであるが、この廟が彼のために捧げられたことを考えてみても、この聖人の比重は大きいと言わなければならない。

さらに窓の上の半円アーチの柱間上部にも6人の聖女が描かれ、その中にはクリュニー修道会が崇めていたリヨンの聖女、コンソルも見える。美術史家、レイモン・ウルセルがこうした表現のなかに、ビザンチンの西欧における中心であるラヴェンナの壁画、とくにサン・ヴィターレ教会の影響（たとえばテオドラ王妃）を指摘しているのも興味ぶかい。

先のガルラ・プラチディア廟もふくめての話であるが、どのようにしてクリュニーにビザンチンの影響があらわれたか、今一つ分明ではない。ただ一つの手掛かりとして言えることは、クリュニーの聖ユーグ（1049-1109）が、イタリアのモンテ・カシーノの聖ベネディクト修道院で働いていた職人たちを呼んだという説がある。言うまでもなく、当時のイタリアはビザンチン文化が大きな力を占めていた。たとえばシチリアのモンレアーレにあるサンタ・マリア修道院には、ミラノやモンテ・カシーノからもモザイストや彫刻師が赴いている。シエナは言うに及ばない。

6世紀にはじめて聖ベネディクトウスが修道院規則をつくり、それがヨーロッパ全体に及んだこともあって、モンテ・カシーノは宗教的にも文化的にも一つの中心となった。したがってここを経由してビザンチンがクリュニーに来たことも頷けるゆえんであり、単に「典礼」の問題だけではなかったのである。左右の半円アーチの窓に続く盲アーチには聖ブレーブの牢獄と斬首の部分とサラゴサの火責めにあっている聖ヴァンサンの殉教が描かれている。一説にはこの2人の聖遺骨をクリュニー修道院が持っていたという。

最下段には9人の聖人が描かれ、そこに聖ゴルゴンや聖セヴァスチャン、それにアブドンとサントンの聖人像を見ることができるが、この2人も東方で殉教したのであった。このような、キリスト以下、使徒、聖人たちの描き方には、ある気品というものが漂っていて美しく感動的だ。マンドラの地色は深い青であり、ビザンチンに多い星形のしるしが散らばっている。キリストの右下にある聖ロレンティウスと聖ヴァンサンの顔貌はビザンチンという以外にはない。

これらの構図は、また細密画からも多くの影響を受けているという。中世は、造形美術の表現のジャンルでは構図や技法の間に交換があった。細密画と半円形壁画の彫刻、象牙彫りと柱頭彫刻の間というように。またクリュニー修道院だけではなく、のちのシトー修道院にいたハルディング師が写本と装飾写本師たちを集めたが、その工房（アトリエ）はきわめてビザンチン的であったという。シトー修道院とクリュニー修道院との間は僅か80キロにすぎない。ビザンチン文化をめぐる影響関係もまた決してそれと無縁ではないだろう。

もとよりフランスにビザンチン文化の影響は少ない。壁画についてもピレネーやロワール地方に入っているが、しかし、まるで宝石のように美しいこのベルゼ・ラ・ヴィルの壁画は感動的である。そんな思いを残しながら私は礼拝堂を出て、野の花々に見とれながら小径をまた下って行った。

**Château de Chailly**
シャトー・ドゥ・シャイイ

16世紀のルネッサンス様式のシャトーを改装したホテルです。現在、ゴルフ、リゾートクラブ会員として日仏友好会員を募集しております。
ルネッサンス・シャトーを軸として、何世代にも渡る日仏文化交流にご興味をお持ちの方はお問い合せ下さい。

**問い合わせ先:㈱佐多商会　ブルゴーニュ事業部**
**TEL:03-3586-8873（東機貿ビル内）　担当:岩 沢**